明治期の絹織物と先覚者

福井県立大学地域経済研究所
奥山秀範

坪田孫作郎（粟田部の製糸家・機業家）

羽二重前史時代に製糸の品質改良に取組み、機業家としてもいち早く羽二重の優位性に着目し、小林清作とともにてその導入に貢献した。

福井の小川喜三郎らと早くから横浜の外商との取引を開始し福井羽二重の輸出にも大いに貢献した。

また村内に伝習所などを設置し、技術の普及や職工の養成にも努めた。

明治35年8月23日67歳で没（円正寺）

花筐公園にかれの功績を顕彰した記念碑が建立されている

村野文次郎

（旧福井藩士）

羽二重王国・福井の先覚者で、自ら先進地の技術を福井に導入し、機業家としても成功した有力な業界人である。織物福井の第一歩は、明治9年の伝習生派遣に始まる。村野は洋式染色法研究のため京都府立染色伝習所へ派遣され、帰福後、その技術普及に努めた。

山岡の紹介で、桐生の著名な織物事業家森山芳平と交渉し、高力直寛の福井招請を実現し、羽二重織物の興隆の基礎を築いた。

高力直寛

（旧松山藩士）

明治の第一級織物技術者。羽前松山藩に生まれ、後、桐生に移り森山芳平に師事。その才が認められ、西陣の佐倉常七のもとで、ジャカード織物の習得、さらに森山の指示で、福井に赴き羽二重織を無償で講習。これが羽二重王国福井誕生のきっかけとなった。後年、教育界に転じ東京高等工業学校（現東京工業大学）の教授として後進の育成にあたった他、織物技術の審査員なども努めた。

森山芳平

（桐生の機業家）

早くから織物や染色改良に取り組み、17年には農商務省技師山岡次郎を桐生に招いて染色法の改良に努めた。

桐生織物の名を高める一方、自身または弟子を各地に派遣して技術指導を行った。高弟高力直寛の福井派遣・羽二重講習はあまりにも有名で「羽二重王国福井」の生みの親となった。